



Title	カイロ方言の能動分詞における時間性：統一的説明に向けて
Author(s)	中道, 静香
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2004, 4, p. 31-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カイロ方言の能動分詞における時間性

—— 統一的説明に向けて ——

中道 静香*

Temporality in Cairene Arabic Active Participles: Towards a Unified Account

The Arabic active participle (AP) is morphologically classified as a noun. The AP does not inflect for tense and aspect, nor does it refer to specific tense and aspect itself. We can say that the AP is atemporal in nature. As pointed out in previous studies, however, APs are actually interpreted as bearing temporal meanings such as present state, perfect, near future, circumstantial state and so on. In these cases, APs function as if they were verbs.

This paper surveys various temporal meanings found in the verbal uses of Cairene Arabic APs, and explores semantic grounds for linking these uses. I suggest that “stative” and “current relevance” are the essential temporal values of the AP. The former value relates to aspect in that the AP describes a static and homogeneous phase of an event. The latter relates to tense because the AP indicates an event relevant to the moment of speaking (present). These seem to be consistent with the atemporal nature of the noun or the nominal uses of the AP. All the temporal interpretations given to APs, which apparently have no characteristics in common, are connected with these two values in one way or another, maintaining the unity of the AP as a grammatical category.

1. 序

はじめに、カイロ方言の能動分詞に与えられる意味解釈がいかに多様であることを示すため、いくつかの例を挙げることにしたい¹⁾。まず統語的環境とそれに伴う意

* 大阪大学大学院言語文化研究科 助手

1) 以下の例は、エジプト人作家 Tawfīq al-Hakīm の口語による戯曲、*Az-Zammār* (1932) から引用したものである。この作品は、タラ (メヌフィーヤ県) というカイロの北西に位置するデルタの田舎町を舞台としているが、能動分詞の使用に関してはカイロ方言のそれと大差ないものとみなし、原典通りのアラビア文字表記とそれに対するローマ字転写表記を併記する形で例示に用いた。Behnstedt と Woidich による複数の方言地図 (Behnstedt und Woidich 1985) によれば、両地域方言の少なくとも音韻・形態的特徴はかなり近似している (これらの地図においてカイロの位置は571、タラの位置は 366(a)の番号で示されている。まずは地図561から参照のこと)。[] 内の数字は Maktabat Miṣr 版のページを示す。能動分詞の下には太い実線、能動分詞と強く結びついている否定辞やその他の要素の下には細い実線を施し、それら全体に対応する和訳部分にも下線を引いた。和訳内の [] は筆者による補足。中には意訳せざるを得ないものもあったため、参考までに能動分詞が派生した動詞の原義を〈 〉に記した。

味の違いから、能動分詞は (1) のような名詞的用法、(2) のような形容詞的用法、(3) のような動詞的用法の3つに大別することができる²⁾。

(1) بصفة ان منك كاتب صحه، ومعاون محلات، ومفتش مأكولات!..

bi-šifat ʔinnī minn-ak kaatib šihḥa, wi-m(i)ʿaawin mahallaat, wi-m(u)fattiš maʿkulaat!..
(あなたが保健所の事務官でも、商店の管理顧問でも、食品検査官でもあるとい
う立場を利用してね。〈書く・補佐する・検査する〉) [129]

(2) الست مش عايزه تسمع كلام فارغ!..

ʔis-sittī miš ʿayza tismaʿ kalaam faariḡ!.. (ご婦人はたわごとなどお聞きになりたくない。〈空になる〉) [172]

(3) واقف ليه؟.. روح لشغلک..

waaqif leeh?.. ruuḥ li-šugl-ak..
(なぜ突っ立っているんだ？ 仕事に行け。〈立つ〉) [172]

さらに、動詞的用法の中には、(4)-(6) のように現在における状態を表すもの、(7)-(9) のように過去の出来事に言及するもの、(10)-(12) のように近い未来の出来事や話者の意志を表すものがあり、その時間解釈には大きな揺れがある。

(4) مستنظرين شهادة الصحة،

mistanzariin šahadt iṣ-šihḥa,
([我々は] 保健所の〔埋葬〕許可証を待っているのです。〈待つ〉) [120]

(5) وراس السكر القمع طالة من جوه الخرج!..

wi-raas is-sukkar il-qumʿi ṭalla min guwwa l-xurḡ!..
(それに、棒砂糖の先が袋から突き出ているぞ。〈出っ張る〉) [118]

(6) يعنى مش ناوى تسمع الكلام يا «عم سالم»؟..

yaʿni miš naawi tismaʿ ik-kalaam ya ʿammī, saalim?..
(つまりあんたには話を聞く気がないのね、サーリムの旦那。〈意図する〉) [143]

(7) إحنا لسه فاطرين عند «عيسوى بك»!..

ʔihna lissa faṭriin ʿandī ʿisawī bee!.. (私たち、イーサウィー・ベイのところでちよ
うど朝食をいただいたばかりなの。〈朝食をとる〉) [161]

(8) من حسن حظى انها لسه جديدة، مستلمها من ثلاث ايام، ولا طلعتش بها لسه!..

2) Hinds and Badawi, *A Dictionary of Egyptian Arabic* でも、(1) および (2) の能動分詞はそれぞれ名詞 (/n/)、形容詞 (/adj/) という独立した品詞項目として記載されており、(3) の能動分詞は動詞の項目中に含まれている。ただし、上記辞書において形容詞と記された能動分詞の中には、متأسف (申し訳なく思っている) のようにもっぱら叙述的に用いられるものなどもある。このような場合は、形容詞的用法/動詞的用法の区別は曖昧で、両者を分けて考えることにはあまり意味がない。なお、派生形 (II 形~X 形) 能動分詞の名詞的用法では、語頭の m に u の母音がつくことが多く (例えば、(1) の مفتش は mufattiš と読まれる)、i の母音が用いられる動詞的用法 (mifattiš) とは mu-/mi- の音韻対立を示す。しかしこれについても例外があったり (例えば (1) の معاون は名詞的用法であっても miʿaawin と発音され、動詞的用法と同形)、言語使用域によってこの対立が見られないこともあるので、弁別のための絶対的特徴とはいえない。

min ḥusn, ḥazz-i 'inn-a-ha lissa g(i)diida, mistilim-ha min talatt iyyaam, wa-la t(i)liṭi-š bii-ha lissa!.. (幸い、それ〔パッカード車〕はまだ新しい、三日前に受け取ったところで、私もまだそれに乗って出かけたことはないのです。〈受け取る〉)[159]

(9) أنا مش قایل لك يا «سى سالم» أول ما تصطحب تما الفنتاس؟..

'ana miš qa'il l-ak ya «si saalim» 'awwil ma tiṣṭibiḥ timla l-fintaas?..

(朝出勤したらまず貯水タンクをいっぱいにしると私はお前に言わなかったか、サーリム?〈言う〉)[146]

(10) يعني جاي والا مش جاي؟..

ya'ni gaay walla miš gaay?..

(結局、来てくれるの、それとも来てくれないの?〈来る〉)[142]

(11) مش مسافرة دلوقت!..

miš misafra dilwaqti!..

(彼女は今 (すぐ) 出発するわけじゃない。〈発つ〉)[137]

(12) وشرف أمك ما انا فايتك!..

wi-šaraf 'umm-ik ma (ʔa)na fayt-ik!.. (お前の母親の名誉にかけて、俺はお前をただ
じゃおかないぞ!〈素通りする〉)[144]

また能動分詞は、他の動詞 (句) に支配される場合もある。(13) と (14) における能動分詞は、ともに過去時を示す kaan の後に置かれ、それぞれ過去における状態や過去完了として解釈される。

(13) كنت خايف من إيه؟..

kunt; xaayif min 'eeh?.. (あなたは何を恐れていたの?〈恐れる〉)[166]

(14) أنا كنت سارقه فراخك، والا حارقہ دارك لما تدعى على!..

'ana kunt; sarqa f(i)raax-ak walla ḥarqa daar-ak lamma tid'i 'alay-ya?!..

(私に悪態をつくなんて、私があんたの鶏を盗んだとか、家を燃やしたとでも言うのかい?〈盗む・燃やす〉)[116]

他にも (15) や (16) のように、能動分詞が従属節 (付帯状況節) や知覚動詞の補文の中に用いられ、主動詞が示す時点における状態を表す場合がある。

(15) وحضرتك شفتهم سبعة وانت ما رر بالصدفة من قدام السراية؟..

wi-ḥadrit-ak šuft-u-hum sab'a w-ʔinta maarir bi-ṣ-ṣudfa min quddaam is-saraaya?!..

(あなたは屋敷の前を偶然通りがかったときに、彼らが七人いるのを見たんですね?〈通る〉)[152]

(16) والتفت لقيت «سالم» واقف نايم على روجه،

wi-(ʔi)ltafatt; laqeeṭ «saalim» waaqif naayim 'ala ruuh-u, (振り返ると、サーリムが立
ちながらうつらうつらしているのに気がつきました。〈立つ・眠る〉)[169]

次の (17) と (18) はこれまでの例とはやや性質が異なり、qaam (立つ) や raah (行く) という特定の動詞に後置される場合の用法である。ここでの動詞 (qaam, raah) + 能動分詞は、瞬時性・意外性を伴う出来事の継起を表すとされる³⁾。

(17) ساعتها انغظت، قمت ضاربه بالقلم فاق من النوم،

sa'it-ha (ʔi)nḡazt, qumt; ɖarb-u bi-l-qalam faaq min in-noom,

(その時は私もカッとききましたから、すぐさま奴を平手でぶって目を覚ましてやりましたよ。〈打つ〉)[169]

(18) وطلعت في دماغه راح سايب الصحه والشغل، وطفش وراها،

wi-ṭil'it fi d(i)maaḡ-u raah saayib iṣ-ṣiḥḥa w-iṣ-ṣuḡl, wi-ṭifiṣ waraa-ha,

(何を思ったのか、奴は突然保健所と仕事を放り出して、彼女の後を追って逃げたのです。〈放棄する〉)[168]

さらに、(19) のように、raah の能動分詞形自体が他の動詞を従え、未来時を表すマーカーとして機能する場合もある。

(19) يا « سالم »، عندي خير رايح يطير عقلك تمام!..

ya «saalim», ʿand-i xabar raayih yitayyar ʿaql-ak tamaam!..

(サーリム、お前の頭を完全にイカれさせてしまうような話があるんだぜ！〈飛ばす〉)[130-131]

以上、例の提示が多くなったが、これらを一瞥するだけでも、能動分詞というひとつの形式が文脈の中で多様な意味と機能をもちうることがわかる。

本稿は、カイロ方言の能動分詞がもつ以上のような諸用法に対し、認知的観点から統一的な説明を与えることを目指す。すなわち、一見共通点がないように思われるこれらの用法も、核となる特徴が様々な方向に拡張した結果得られたものであり、それらは全体としてある種の意味ネットワークを形成しているとみなす。具体的には、先行研究において適切に捉えられてきた「状態性」および「発話時関連性」という能動分詞の特徴を、「名詞」形式に本来備わっている「非時間的」な性質の拡張として観察することから出発する。そして名詞というカテゴリーに属する能動分詞が、テンス・アスペクト的意味を帯びた形式として機能する、すなわち「時間性」を獲得する場合に、いかなる時間的意味と結びつきうるのか、またその意味拡張の動機付けはいかなるものかを検討する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2節で能動分詞が名詞の形態をもつという自明の事実に立ち戻り、そこで得られる能動分詞の根本的性質について確認する。以降の節では、この能動分詞の根本的性質によって動詞的用法の実現がどのように方

3) Woidich (1975: 288), Hinds and Badawi (1986: 356, 723), Mitchell and al-Hassan (1994: 76-78), Brustad (2000: 199-200) を参照。

向づけられるかを見る。3節では現在時と結びつき、主に状態を表す場合、4節では現在時以外の時間（過去や未来）における出来事に言及する場合、5節では従属節の中に現れる場合の能動分詞をそれぞれ扱う。最後に6節で、以上の諸用法がどのように関連し合い、同じ形態としての一体性を保っているかをまとめ、結論としたい。

1. 名詞としての能動分詞

前置詞や接続詞といった不変化詞（小詞）を除くと、アラビア語を構成する語は、形態上、動詞と名詞の2つに分けられる⁴⁾。両品詞の意味的な違いに注目するならば、動詞はなんらかの時間的意味と結びつく形式であるのに対し、名詞はそのような時間的意味とは結び付かないことが、挙げられるだろう。つまり、両者には時間的／非時間的という対立がある。さらに言えば、動詞は2つの意味で時間的といえる。1つは、動詞によって表される事態が、基本的に時間軸上のどこかに位置づけられるという点、もう1つは、その事態そのものが時間的展開（例えば動作の始まりと終わり、変化の前後など）をもつという点である。いうまでもなく、これらはテンスとアスペクトという、通言語的な文法カテゴリーにそれぞれ相当する。一方、名詞は時間軸とは無関係であり、時間の推移に沿った展開もない、非（超）時間的な形式である。このことは、動詞を述部にもつ文が、典型的には出来事（何が起こった／起こっている／起こるか）を述べるのに対し、名詞を述部にもつ文は属性や様態（どのようなものであるか）を表すという、叙述内容の違いを引き起こす。

さて、能動分詞は本来、定型（finite form）である動詞が人称マーカを失い、かわりに名詞の形態的特徴を備えることにより、不定形（infinite form）として機能するに至った形式である。実際それは「行為者の名詞（ism al-fā'il）」と名づけられていることからわかるとおり、名詞に分類される。この用語を素直に解釈する限り、「動詞が表す行為を行う者」を意味する名詞的用法が、その基本にあると考えてよいだろう。もちろん能動分詞は、上記の通り動詞から派生し、動詞的意味を含んでいるが、この形式自体はその「行為」を「出来事」として提示することを本務としているのではない。例えば、Aḥmad mudarris（アフマドは先生である）のような文で用いられる能動分詞 mudarris は、「教えるという行為を行う者（＝先生）」という、時間の流れに無関係な属性として機能する。darris（教える）という動詞から派生していても、そこから時間的要素は捨象されているのである。「アフマドは（現在）先生である」のように、現在における事態として解釈されることはあるが、これは、特に指定がない限りにおいて「X は Y」文が発話時（現在）と結びつくことに由来するものである。このように能動分詞が、積極的な形で外的な（事態とは別個に存在する時間軸上の）時点を指示せず、また内的な（事態内部における）時間的展開ももたないという特徴を備えていることを、まずは確認しておきたい。

4) 語を fi'l（動詞）、ism（名詞）、ḥarf（小詞）の3つに分ける品詞論は、Sibawayh によって提示され、その後のアラブ文法学に引き継がれた考え方である。ここでは、この品詞論を口語にも準用するが、詳細には立ち入らない。

3. 動詞的機能をもつ能動分詞

以上に述べた、能動分詞の2つの「非時間性」という本質的特徴は、動詞的用法に対しても、少なくない影響を及ぼしている。次にこの点について検討する。

動詞的機能をもつ能動分詞に関してはいくつかの先行研究があるが、その内容は以下のようにまとめられる。まず、能動分詞が「現在の状態」の他にも「パーフェクト」や「近未来」を表すという事実を認め、他の動詞形式との比較やテンス・アスペクト体系における位置づけを行った一連の研究がある⁵⁾。これらの研究の中で、能動分詞は「結果残存性 (resultative)」(Woidich 1975)、「発話時関連性 (current relevance)」(Mitchell 1978)、「状態性 (stative)」(Eisele 1990a) などの特徴と結び付けられている。いずれも重要な特徴であるが、これらの概念によって、能動分詞のあらゆる用法が包括的に説明されるまでには至らなかった⁶⁾。

またこれと密接に関連する先行研究のもう一つの流れとして、Mitchell (1956, 1962)、el-Tonsi (1992, 初版は1982)、Woidich (1975)、Eisle (1992, 1999) などに見られる動詞分類の試みが挙げられる。これらは、動詞語彙によって能動分詞と bi-接頭辞活用形 (未完了形) の意味実現が異なることに着目の上、各語彙における形式と意味の対応関係を記述し、さらにこの対応関係を指標として動詞のグループ分けを行ったものである。同じ文法的ふるまいを示す動詞を分類して提示することには一定の意味があるが、実際には個々の研究における指標の適用の仕方と分類結果に大きな隔たりがあり、この種の動詞分類の困難さを物語っている⁷⁾。

5) アラビア語諸方言の能動分詞に関する研究としては、キレナイカ (リビア) の遊牧民方言を扱った Mitchell (1952)、シリア・パレスチナ方言を扱った Wild (1964)、カイロ方言を扱った Woidich (1975)、またエジプト方言、ヨルダン方言、コイネー的性格をもつ Educated Spoken Arabic の比較を行った Mitchell (1978)、複数の方言を扱った Caubet (1991) などの記述的研究がある。動詞体系全体を視野に入れた Jelinek (1981)、Mitchell and al-Hassan (1994)、Cuvalay-Haak (1997)、Eisele (1999) などの研究や、各方言の Reference Grammar においても能動分詞は大きく取り上げられている。

6) 例えば、先行研究における「結果残存性」「発話時関連性」という用語は、過去の出来事を含意するいわゆるパーフェクトの説明に用いられたものであり、能動分詞の未来指示や、特に結果を含意しない現在の状態を説明するものではなかった。ただし、パーフェクトに限定しない形での「発話時関連性」については、十分な説明力があると筆者は考えており、これについては後の節で扱う。また「状態性」という特徴付けも、能動分詞の多くの用法を説明できる可能性をもっているが、その際には「状態」の内容、つまり「状態」的なものとみなされる意味範囲を明確にする作業こそが重要な意味をもつと思われる。その他の観点として、Woidich (1975: 274) はカイロ方言の能動分詞における「確信性の機能」「表明レベルおよび呼びかけレベルにおいて果たされる役割」に触れている。これは Denz (1971) がイラク・クワイリシュ方言の動詞研究の中で示した知見を踏襲したもので、Woidich は、能動分詞の本質を捉えるためには、命題レベルだけではなく、対人レベルをも考慮に入れる必要があることを指摘している。この観点は、一部の用法においては非常に有効であるが、すべての用法に適用できるわけではない。なお、コーランに現れる能動分詞を分析した Kinberg (1992) は、能動分詞が一義的には同時性 (simultaneous) と非完結性 (imperfective) によって特徴付けられるとみなし、パーフェクト相および前望相的用法についても、半非完結性 (semi-imperfective) という非完結性の下位カテゴリーに位置づけられるものとした。分析対象は異なるが、本稿がとる基本的な考え方は Kinberg のそれにもっとも近い。

7) Mitchell は、能動分詞が表す意味、すなわちそれが「動詞の表す行為を成し遂げた状態を指す (過

以上述べた能動分詞に関する諸研究は、結局のところ、本来時間性をもたない能動分詞が、いかなるタイプの時間性を獲得したかを詳細に記述したものと理解することができるだろう。そして本稿では、このような時間性獲得のプロセスにおける、次の2つの側面に注目したい。1つは、能動分詞が概して、時間の推移によって変化することのない均質的な局面、すなわち「状態」的局面を取り出して、描写するという点である。これは、能動分詞を含む名詞の非時間性、つまり内的な時間的展開をもたないという性質を反映していると考えられる。一方、時間の推移によって刻々と変化するような動的な事態の描写は、能動分詞の非時間性に合致せず、これについては別の動詞形式が用いられる。

もう1つの時間性獲得のプロセスは、能動分詞自体が特定の時間指示機能をもたないことに由来する。この形式に与えられるテンスの意味は、かなりの程度まで統語的環境や文脈に依存するが、その中で能動分詞がまず結びつくのは、話者が発話を行う限りにおいて確実に存在し、話者と聞き手にとって最もアクセスしやすい時間軸上の一点、すなわち発話時である。とくに能動分詞が単独の（他の動詞に従属しない）述語として用いられる場合には、基本的に「発話時=現在」が基準となり、その時点における事態を描写する。能動分詞は、このデフォルトとしての「発話時間連性」によって、二次的に現在テンスを得るのである。

以上、能動分詞がもっとも獲得しやすい時間性として、「状態」というアスペクトと「現在」というテンスの2つを取り上げた。次なる課題は、「状態」にはどのような事態が含まれるのか、また「現在」はどこまで広がりうるのかを明らかにすることである。以下の節で、これら2つの「時間性」の内実を見ていくことにしよう。

3.1. 現在における「状態」

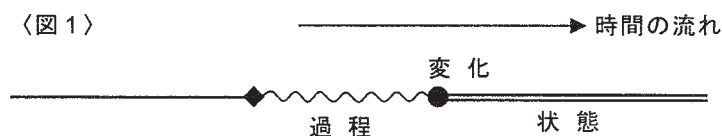
まず、能動分詞によって表される、現在における「状態」の検討から始める。具体的作業として、同じく現在における継続事態を記述する形式、bi-接頭辞活用形と

去の行為の含意がある)」ものか、「過去指示をもたない（具体的には近未来を表す）」ものかによって、動詞を2つのグループに分類した。この分類では、ほとんどの動詞が前者に含まれ、後者には移動動詞というごく限られた種類の動詞しか含まれなかった。Woidich (1975) は、能動分詞が「過去の完結した行為とそこから結果として生じる状態を表すもの」と「現在進行している、あるいは未来の行為を表現するもの」という基準によって、やはり動詞を二分類している。ただし、Mitchell が「過去を指示しない」と消極的に定義し実質的には「未来」と同義であった後者のグループに「現在進行している行為」が加えられ、移動動詞以外の動詞群（状態動詞、知覚・感覚動詞、心理動詞）もリストアップされている。Woidich の分類は、基本的に能動分詞が表す意味の違いを出発点としているが、bi-接頭辞活用形の表すアスペクトの意味（つまり bi-接頭辞活用形が現在を指示できる動詞（進行を表すことができる動詞）と現在を指示できない動詞（進行を表すことができない動詞）との違い）も考慮に入れられている。el-Tonsi (1992) は、能動分詞の意味（「進行」と「現在完了」）および bi-接頭辞活用形の意味（「進行」と「習慣」）とを組み合わせ、動詞を3つのグループに分類した。学習用教材としての性格を反映して、簡潔かつ妥当な記述が行われたものといえる。Eisele (1990, 1999) の動詞分類は、上述のいわば素朴な立場からの動詞分類とは異なり、英語の動詞分類を行った Vendler (1967)、Dowty (1979) の研究を下敷きにし、様々な基準を取り入れた客観的な分類を目指した。扱った語彙も非常に多く、網羅的なリストを提示しているが、細分化の弊害により矛盾も散見される。

〈表 1〉

	bi-接頭辞活用	能動分詞	動詞の例
A	○	×	kal (食べる) širib (飲む) katab (書く) qara (読む) zaakir (勉強する) ḥasab (数える) ‘amal (する) ista‘mil (使う) qatal (殺す) qata‘ (切る) dammar (破壊する) ḡasal (洗う) bana (建てる) naḡḡaf (きれいにする) rattib (整える) masaḥ (拭く) šawwar (写真をとる) rasam (描く) ṭabax (調理する) raqaṣ (踊る) giri (走る) qaal (言う) itkallim (話す) ḡanna (歌う) ‘ayyaṭ (泣く) ḡihik (笑う) ṭalab (頼む) baa‘ (売る) fataḥ (開ける) walla‘ (点火する) fakkar (考える) šakk (疑う) ḡabb (愛する)
B	×	○	qa‘ad (座る) wiqif (立つ) naam (眠る) šiḥi (起きる) maat (死ぬ) ḡaab (いなくなる) baan (明らかになる) ‘aaš (生きる) šaam (断食する) sikin (住む) istanna (待つ) sikit (だまる) ‘aaz (望む) ‘irif (知る) fihim (理解する) šaddaq (信じる) iḡtaag (必要とする) ‘isif (残念に思う) šaaf (見る) ḡass (感じる) raah (行く) geeh (来る) saafir (発つ) rigi‘ (戻る) miši (歩く) ṭili‘ (上る) nizil (下る) rawwaḥ (帰宅する) xarag (出る) daxal (入る)
C	○	○	libis (着る) rikib (乗る) misik (つかむ) šaal (かつぐ) simi‘ (聞く・聞こえる) šamm (嗅ぐ・匂う)

〈図 1〉



の比較を行う。〈表 1〉は、「現在における一時的な継続事態」を表すのに、能動分詞と bi-接頭辞活用形のどちら（あるいは両方）が用いられるかによって、動詞を3つに分類したものである⁸⁾。

この表を概観すると、A グループには、何らかの動作を表す動詞が多く、B グル

8) これは、動詞分類に関する先行研究を参考にしつつ、筆者が独自に構成したもので、それぞれ「(今) 食べている」=bi-yaakul→A、「(今) 座っている」=qaa‘id→B、「(今) 着ている」=bi-yilbis (着る動作), laabis (着た状態)→C というように、形式選択の違いに基づいて動詞を分類している。なお、ここでの「現在における一時的な継続事態」とは、発話時を含むある個別的な時間幅における、動作の進行や明確な状態を指す。bi-接頭辞活用形による習慣と反復、能動分詞によるパーフェクト (中道 (2002) で効果継続と呼んだもの) はこの「継続事態」に含めない。したがって、表中の×の記号は、例に挙げられている動詞が能動分詞形や bi-接頭辞活用形での使用が不可能であることを意味しないことに注意されたい。またこの表は、あくまでも目安として提示したもので、動詞と結びつく項の種類や文脈によっては、ここでの分類が不適切となる可能性もある。例えば、客体の変化を表す動詞は、通常能動分詞が「状態」を表さず、A グループに含まれるが、その目的語に主体の身体の一部を表す語が入ると、再帰性が生じるため、結局主体 (主語) の状態変化と解釈され、能動分詞句全体が「状態」を表すようになる (例えば、maadid yiid-u (手を伸ばしている) など)。

ープには、状態変化動詞、長期的活動を表す動詞、心理動詞、感覚動詞、移動動詞など、一見して共通項を見出せないような動詞群が含まれている。Cグループには、動作を行うことで主体に変化が現れるような動詞、一部の感覚動詞が含まれる。

「継続」を表すのに異なる2つの形式が用いられることを説明するにあたって、ここでは動詞がもつ時間構造に注目する。一般に、時間的展開が顕著である事態は、大きく「過程」「変化」「状態」という複数の局面から構成されていると考えられる。このうち、「変化」は点として捉えられるのに対し、「変化」に至る「過程」と、「変化」の結果としての「状態」は、一定の時間幅をもった線状的なものとして捉えられる。この時間構造を図示するならば、〈図1〉のようになる⁹⁾。

個々の動詞は必ずしも上記の時間構造におけるすべての構成素を含むわけではなく、「過程」だけの動詞や、「変化」と「状態」だけを含む動詞など、様々な可能性がある。例えば、「踊る」という動詞は主体の「(動作) 過程」のみを含み、「変化」は特に含意されないのに対し、「眠る」という動詞は起きている状態から眠った状態への主体の「変化」とその後の「状態」の両方が構成素となる。さらに「着る」という動詞は、衣服を身につけるという主体の「(動作) 過程」、衣服を身にまとった状態への主体の「変化」、そしてその後の「状態」のすべてを構造の中を含む。「壊す」であれば、主体が客体に対して影響を及ぼす「(動作) 過程」とそれによって引き起こされた客体の「変化」、客体の変化後の「状態」を含むことになる。

カイロ方言において、bi-接頭辞活用形と能動分詞が関係するのは、いずれも任意の動詞がもつ時間構造の幅のある部分、すなわち「過程」と「状態」である。両者はこれらの継続的局面を切り取り、描写する形式であるといえる。

ここで再び、能動分詞の根本的性質である「非時間性 (特に事態の時間的展開がないこと)」に立ち戻ろう。能動分詞のこの性質に調和すると考えられるのは、「過程」ではなく「状態」、つまり「変化」後にそれ以上展開することなく継続する局面である。端的な例では、「立つ」「眠る」などの「変化動詞」における、変化後の状態「立っている」「眠っている」がこれに相当し、この状態の継続が能動分詞によって表される。

一方、「踊る」や「泣く」のように、際立った物理的動きをもち、その開始と終了(オンとオフ)が明確である「動作動詞」は、その時間的構造の中に、能動分詞の「非時間的」性質と調和する局面がない。実際、能動分詞が「踊っている」「泣いている」のような動作の継続を表すことは不可能である。この種の叙述は、本来の動詞の一形態である bi-接頭辞活用形が担う。このように、顕在的な動作や変化を表す動詞については、bi-接頭辞活用形と能動分詞の分担基準が比較的明確であり、前者が動作過程の継続を、後者が状態の継続を表すという図式が成り立つ。

しかし、当然ながらこのような単純な二分割ですべての動詞のふるまいが説明できるわけではない。bi-接頭辞活用形と結びつく「動作動詞」と、能動分詞と結びつく「変化動詞」という両極の間には、より曖昧な性格をもつ動詞群が位置づけられ

9) 金水 (2000: 16) における図を単純化した。

る。例えば、人間の内面を表す動詞である。これらは、物理的な運動・変化を表す動詞と比べ、その動きや変化を認識することが困難である。

このような種類の動詞にはやはり、その継続的事態を bi-接頭辞活用形が表すものと能動分詞が表すものの2種類があるが、その基準は必ずしも明確ではない。あえて言えば、「考える」「疑う」「愛する」のような意図的な心的活動を bi-接頭辞活用形が表し、「恐れる」「感じる」のように主体の意図とは無関係に陥いる心的状態は能動分詞が表す、という傾向がある。この違いを引き起こす要因としては、まず主体が(能動的な)「行為者」であるか、(受動的な)「経験者」であるかという点が考えられるであろう。これは「動作」と「状態」の主体が、それぞれ「行為者」と「経験者」という意味役割をもつこととも平行性がある。

しかし、事態の主体が「行為者」であっても、「生きる」「住む」「断食する」などの長期的活動を表す動詞、他にも「だまる」「待つ」のような動詞については、能動分詞がその行為の継続を表す。これはどのように説明すればよいだろうか。私見では、これらの動詞が意味するところは、具体的な動作というよりは、特に行為者がエネルギーを投入することなしに成立する行為であったり、遂行中であることがそれほど明確とはいえない行為である。つまり、これらの動詞によって表される行為は、総じて具体的な動きが認識されにくい種類のものであり、この動きの抽象性によって bi-接頭辞活用形が選択されないのだと考えられる。

すると、今度は「行く」「上る」「出る」のような移動動詞の扱いに矛盾が生じるように思われる。というのも、これらはまさに動きを表す動詞であるにもかかわらず、能動分詞がその行為の継続を表すからである。しかしこれに該当する移動動詞とは、主に移動(位置変化)の方向(例えば往来、上下、内外など)に重点が置かれた動詞であって、移動に伴う動作や様態を中心的な意味として含むものではない。つまり、方向あるいは経路というかなり抽象的な移動のあり方(過程)を記述する動詞にほぼ限定されている。そして能動分詞は、この移動の過程をいわば均質的なものととらえ、描写しているといえるかも知れない。

5. 「現在」の拡張

前節では、現在を含む継続的事態を表す形式として、能動分詞と bi-接頭辞活用形を取り上げ、その棲み分けの要因を考察した。能動分詞は、時間的展開がないという意味での「非時間性」により、変化のない均質的な事態＝状態を切り取り、その局面を叙述することを見た。状態という用語が適切でないような事態の継続にも能動分詞が用いられる場合はあるが、そのような動詞には、意図性が低い、行為の具体性が低い、といった特徴が見られることを指摘した。つまり、カイロ方言ではこれらも時間的展開の少ない「状態」の延長上に位置づけられるのである。

さて、これまで見てきた能動分詞の用法は、現在を中心に据えたある時間幅を叙述の対象とするものであった。一方、能動分詞に託された意味としてよく言及される「パーフェクト(結果残存)」や「近未来」の用法では、場合によっては現在以外

の時間を表す副詞を伴い、「過去」や「未来」の出来事を伝える。本節では、能動分詞の「非時間性」がどのようなプロセスを得て、上記の用法を可能ならしめているかを考察し、また能動分詞の用法全体における位置づけを考える。

中道 (2002) で指摘したように、パーフェクトを表すとされる能動分詞は、限定された文脈、つまり話者が発話時において、聞き手との間に何らかの知識を共有していると確信する状況の中で、用いられる。会話の参与者、時間、場所を含む、発話の場にかかなりの程度まで依存した用法である。本来、ある事態を時間軸に位置づける機能をもたない能動分詞が、過去や未来の事態を何の制約もなく叙述することはできない。あくまでも発話時を参照・経由した上での過去や未来の叙述に限定される。

しかも、能動分詞によって叙述される過去や未来の事態は、単に出来事を叙述したものではない。接尾辞活用形 (完了形) による「彼が書いた」は、過去時において「彼が書く」という出来事が起こったことを単純に述べる文であるのに対し、能動分詞による「彼が書いた」は、「書いた」という事実から引き出される何らかの効果が、現在も「彼」をとりまいている状態にあることを述べる。つまり、ここでの能動分詞の使用は、過去の行為によって現在の彼を特徴づける、あるいは彼の過去の行為を現在の彼の属性の一つとして捉えることを意味するのである。さらに、このような含意をもつ能動分詞の選択は、相応の動機によって裏づけられている。その動機とはすなわち、会話におけるコミュニケーション上の戦略として、様々なニュアンスを付加することに他ならない。ここで本稿の冒頭に挙げた例を再掲し、この点について確認してみよう。

(7) إحنا لسه فاطرين عند «عيسوى بك»!..

‘ihna lissa faṭriin ‘and; ‘isawi bee»!.. (私たち、イーサウィー・ベイのところでちょうど朝食をいただいたばかりなの。〈朝食をとる〉) [161]

(7) は、飲食をすすめられた女性歌手がそれを断るために述べた文である。「朝食をとった」を能動分詞形で述べることによって、その行為が引き起こすと推測される「満腹」という状態が継続していることを伝え、これを申し出を拒む言い訳として用いている。

(8) من حسن حظى انها لسه جديدة، مستلمها من ثلاث ايام، ولا طلعتش بها لسه!..

min ḥusn, ḥazz-i ‘inn-a-ha lissa g(i)diida, mistilim-ha min talatt iyyaam, wa-la t(i)li‘t; bii-ha lissa!.. (幸い、それ〔パッカード車〕はまだ新しい、三日前に受け取ったところで、私もまだそれに乗って出かけたことはないのです。〈受け取る〉) [159]

(8) は、車が故障してカイロに戻ることができなくなった女性歌手に対し、田舎町の富豪が購入したばかりのパッカード車を提供しようとする場面での台詞であ

る。「三日前に受け取った」を能動分詞形で述べることで、話者の手元に真新しい高級車があることを示し、ひいては彼女を手助けする十分な能力をもつと強調する。

(9) أنا مش قايل لك يا «سى سالم» أول ما تصطبج تملا الفنتاس؟..

ʔana miš qa'il l-ak ya «si saalim» ʔawwil ma tiṣṭibih timla l-finṭaas?..

(朝出勤したらまず貯水タンクをいっぱいにしろと私はお前に言わなかったか、
サーリム？〈言う〉) [146]

(9) は、保健所の医者が看護師に向かって発した台詞であるが、「～するよう言った」と能動分詞形で表すことは、彼がその命令を行ったことに確信をもち、かつその指示内容は遂行されていて当然だと信じていることを含意する。そして、現実にはその命令を遵守していなかった看護師に対し、非難を浴びせているのである。

ここで挙げられている過去の行為に由来する現在の状態は、前節で扱った「現在における状態」ほど明確ではなく、一般常識や前後の文脈によって推測される類のものである。しかし、それ以上展開することのない均質的な局面であるという点では、これらも「状態」の範囲におさまるといえよう。同じことは、近未来を表す能動分詞についてもあてはまる。未だ実現していない事柄が能動分詞によって表される場合は、しばしば話者の確信や決心を伴うといった説明がなされてきた¹⁰⁾。このような能動分詞の使用も、話者が発話時において、行為主体が行為の準備段階にあるとみなし、その主体を特徴づけていることを意味する。能動分詞が言及する「過去」や「未来」の出来事は、たとえ時間副詞を伴っていたとしても、その時点に起こった（起こる）ことそのものが問題になっているのではなく、その出来事の生起に起因する効果や影響を帯びている状態、または出来事の生起に備えた状態が、「現在」における行為主体の属性としてとらえられているのである¹¹⁾。

以上をまとめると、能動分詞はまず、「発話時=現在」という発話の場に依存した時間を前提とする。そして、それが「過去」や「未来」の事態を指す場合でさえも、その事態が現在の主体を特徴づけているという意味で、現在との関わりを保ち続ける。なお、このような用法は、会話の参加者がその事態の生起時間を同定することが可能であるという語用論的条件のもとで成立するという点も、重要な点である。

6. その他の用法

以上の節では、基本的に能動分詞が単独で用いられる場合の用法を扱った。そし

10) Woidich (1975: 284), Mitchell and al-Hassan (1994: 27-28), Eisele (1999: 140-141) を参照。

11) 先行研究において、A グループに含まれる動詞の能動分詞形がパーフェクトを示すことさらに強調されてきたのは、これらがもつ時間的構造の中に、「状态的」局面を含んでおらず、時間的展開のない局面とみなしうるものが、動詞の表す行為以後あるいは以前に限られるからだと考えられる。実際のテキストには、B や C グループの動詞の能動分詞が、パーフェクトを表す例も見られるので、先行研究の多くが採用してきた、能動分詞の「パーフェクト」/「現在の状態」という意味の違いを分類基準にするのは、やはり適切でないと思われる。

て、能動分詞が極めて話者と密着した形式であり、いずれの用法においても現在との結びつきを有することを確認した。しかし、能動分詞は他の動詞や節に従属する形で用いられることも多い。

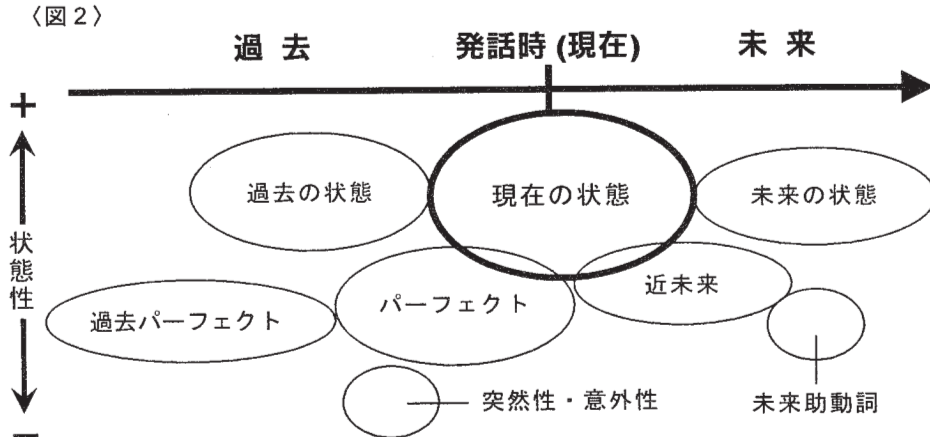
例えば、過去時を表す動詞 *kaan* に後置して過去の状態を表す場合、主節に従属し付帯状況を表す場合、知覚動詞の補文に含まれる場合などである。これまで論じてきた「発話時関連性」とは矛盾するように思われるが、能動分詞は本来、特定の時間指示機能をもたない。他の明確な時間指示形式、つまり動詞や動詞を含む節に従属する場合は、当然ながら、発話時=現在と結びつくかわりに、その主動詞や主節が示す時間に定位され、その時間をとりまく時間幅における状態を描写するものと考えられる。

次に *raah* の能動分詞であり、未来を表す助動詞として機能する *raayih* に移る。これはほぼ同じ機能を持つ *ha-* や *raah* (不変化詞) との語根上の関連から推測されるように、*raah* という動詞そのものに備わっている (英語の *go* と同様の) 未来志向性が大きく影響していると思われる。と同時に移動動詞の能動分詞は、特に誓いの慣用句などを伴わなくとも未来の表現として解釈されやすい性質をもつ。このような移動動詞の能動分詞が共有する未来志向性も当機能をもつに至った要因の一つであろう。*ha-* や *raah* (不変化詞) との使い分けなど、より詳細な考察については今後の課題としたい。

もう一つの注目すべき用法は、動詞 *raah* や *qaam* に後置され、瞬時性や意外性を表す能動分詞である。これは主に語りの文脈で登場し、出来事の継起に時間的緩急をつける効果を与えている。ここには、「状态的」性質はまったく見当たらない。また、ほとんどの場合 *raah*, *qaam* は接尾辞活用形が使われ、過去の出来事を表す場合が多い。つまり、発話時関連性とも合致しない。ただ、この能動分詞は、単なる出来事の羅列からある部分を際立たせ、「すぐに」や「なんと」といった追加的なニュアンスを加えている。語り手 (話者) が出来事を語る上で、聞き手を引き付けるための時間操作を行っているともみなすことは可能である。つまり、語り手は、能動分詞の使用によって、聞き手を発話の場に誘導し、臨場感を追体験させる。この点で、やはり能動分詞は「発話時関連性」とは無関係でない役割を果たしている。

7. 結び

以上本稿は、動詞から派生しつつも形式的には名詞カテゴリーに属する能動分詞が、再び時間性を獲得し、動詞的な意味機能へと逆戻りする、そのメカニズムを明らかにしようとした。ここでは、特にカイロ方言の能動分詞における様々な動詞的用法を概観し、能動分詞が「状態性」というアспектに関わる性質、および「発話時関連性」というテンスに関わる性質と根本的に結びついていることを見た。これらは、名詞に備わる「非時間性」という制約の中で、もっとも結びつきやすい時間的意味である。この両方の意味を兼ね備えた「現在における状態」が、能動分詞の中核的かつもっとも安定した用法と考えられるが、能動分詞はこれを核として、



さらに多くの意味用法を拡張させている。この関係の見取り図を示すと、〈図2〉のようになる。

従来の動詞形式がもちえない意味用法を獲得した能動分詞は、カイロ方言のテンス・アスペクト体系を補完し、さらに新たな分野を開拓しつつ機能しているのである。

[参考文献]

- Behnstedt, P. und Woidich, M. 1985. *Die ägyptisch-arabischen Dialekte, Band 2 (Dialektatlas von Ägypten)*. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.
- Brockelmann, Carl. 1966. *Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen, I, II*. Hildesheim: Georg Olms Verlagbuchhandlung.
- Brustad, K. E. 2000. *The Syntax of Spoken Arabic: A Comprehensive Study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti Dialects*. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Caubet, D. 1991. Active participle as a means to renew the aspectual system: A comparative study in several dialects of Arabic. In Alan S. Kaye (ed.), *Semitic Studies in Honor of Wolf Leslau, on the Occasion of his 85th Birthday vol. II*, 209-224. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Cohen, David. 1984 *La phrase nominale et l'évolution du système verbal en sémitique: Études de syntaxe historique*. Paris: Éditions Peeters.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cuvalay-Haak, M. 1997. *The Verb in Literary and Colloquial Arabic*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Denz, A. 1971. *Die Verbalsyntax des neuarabischen Dialektes von Kwayriš (Irak)*. Kommissionsverlag Franz Steiner GmbH.
- Dowty, D. R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Eisele, J. C. 1990. Aspectual classification of verbs in Cairene Arabic. In M. Eid and J. McCarthy, eds., *Perspectives in Arabic Linguistics 2*, 192-233. Amsterdam: John Benjamins.
- Eisele, J. C. 1999. *Arabic Verbs in Time: Tense and Aspect in Cairene Arabic*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Fischer, W. und Jastrow, O. (eds.) 1980. *Handbuch der arabischen Dialekte*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Fleisch, H. 1974. Sur l'aspect le verbe en arabe classique. *Arabica* 21: 11-19.
- Al-Ḥakīm, Tawfīq. 1932. Az-Zammār. In *Shahrazād*. Cairo: Maktabat Miṣr (n.d.).

- Hinds, M. and Badawi, E.-S. 1986. *A Dictionary of Egyptian Arabic*. Beirut: Librairie du Liban.
- Jelinek, M. 1981. *On Defining Categories: AUX and PREDICATE in Colloquial Egyptian Arabic*. Ph.D. dissertation, University of Arizona.
- Kinberg, N. 1992. Semi-imperfectives and imperfectives: A case study of aspect and tense in Arabic participial clauses. *Lingua* 86: 301-330.
- McCarus, E.N. 1976. A semantic analysis of Arabic verbs. In Orlin L. (ed.), *Michigan Studies in Honor of George G. Cameron* 8-28. Michigan: Department of Near Eastern Studies, University of Michigan.
- Mitchell, T.F. 1952. The active participle in an Arabic dialect of Cyrenaica. *BSOAS* 14: 11-33.
- Mitchell, T.F. 1962. *Colloquial Arabic: The Living Language of Egypt*. London: English Universities Press.
- Mitchell, T.F. 1978. Educated spoken Arabic in Egypt and the Levant, with special reference to participle and tense. *Journal of Linguistics* 14: 227-258.
- Mitchell, T.F. and al-Hassan, S.A. 1994. *Mood, Modality and Aspect in Spoken Arabic*. London and New York: Kegan Paul International.
- Reckendorf, H. 1977. *Arabische Syntax*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Rosenhouse, J. 1978. Circumstantial clauses in some Arabic dialects. *ZDMG* 128: 226-237.
- Sibawayh. (ed. Abd al-Salām Muḥammad Hārūn) 1988. *Kitāb Sibawayh 5vols*. Cairo: Maktabat al-Xānjī.
- el-Tonsi, A. 1992. *Egyptian Colloquial Arabic: A Structure Review 1,2* (5th ed.). Cairo: American University in Cairo, Arabic Language Institute.
- Vendler, Z. 1967. Verbs and times. In *Linguistics in Philosophy*, 98-121. New York: Cornell University Press.
- Wild, S. 1964. Die resultative Funktion des aktiven Partizips in den syrisch-palästinischen Dialekten des Arabischen. *ZDMG* 114: 239-254.
- Woidich, M. 1975. Zur Funktion des aktiven Partizips im Kairenisch-Arabischen. *ZDMG* 125: 273-293.
- Wright, W. 1859-1862. *A Grammar of the Arabic Language*. Cambridge: Cambridge university press.
- 金水敏 2000.「時の表現」『時・否定と取り立て』3-92. 岩波書店.
- 中道静香 2002.「カイロ方言の能動分詞における「結果残存性」再考——語用論的観点から——」『関西アラブ・イスラム研究』2: 71-88.

- 付記 1. 本稿は平成16年度文部科学省科学研究費補助金 (若手研究 (B)、課題番号 16720088) による研究成果の一部である。
2. 本稿の内容については査読者より有益なご指摘とご示唆をいただいた。また例文の解釈および転写の問題に関しては、大阪外国語大学の藤井章吾先生、Samy Soliman 先生より多くのご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。